2020年12月7日(月) 日本海新聞

日々往来

お金も世につれ

岡本 敏男

新型コロナ感染症の流行はお金の動きにも影響を与えている。人や経済の活動が停滞し、現金の動きは低調だが、お札の発行残高は前年比プラス5%台と高い伸びを示している。元々の低金利に加え、外出を控える人たちが手元に現金を多めに持ったためと思われる。一方で、今年は自宅でのネットショッピングなど、キャッシュレス決済を利用する機会が増えた人も多いのではなかろうか。

キャッシュレス決済の利用が世界的に拡大しているが、近年、中央銀行が新たにデジタル通貨を発行することが活発に議論されるようになった。海外では実際に発行に着手する中央銀行も現れている。

日本では現金が幅広く便利に使われ、デジタル通貨発行の計画は今のところないが、将来、環境が急変し、発行ニーズが高まる可能性もあり得る。日本銀行では、10月にデジタル通貨発行に関する取り組み方針を発表し、将来発行する際のあるべき形や考慮すべき点について考え方をまとめ、技術的な実現性の検証に向け、来年度から実証実験に着手することを表明した。なお、現金を供給する責任は今後ともしっかりと果たしていくので、是非安心して現金を使い続けていただきたい。

日本銀行が発行するデジタル通貨は、誰でも、いつでも、どこでも、安全・確実に利用できるお金であるべきだ。そのためには安全性やプライバシー、金融政策や金融システムへの影響、民間との役割分担といった多くの課題をクリアする必要がある。さらなる技術進歩と巧みな制度設計によってこれらをバランス良く解決できるようになれば、いずれ現金と並んで中央銀行のデジタル通貨が安心して使われる時代がやってくるだろう。

（日本銀行鳥取事務所長）